

「鶴見大学仏教文化研究所紀要」第14号（平成21年4月）抜刷

# 西念寺本類聚名義抄における増補と脱漏

—観智院本にないカタカナ注記について—（七）

小林 恭治

## 西念寺本類聚名義抄における増補と脱漏

—観智院本にないカタカナ注記について—(七)


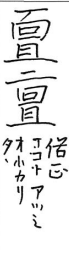

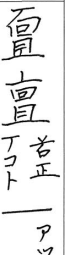
小林 恭治

本稿は、左記の拙稿の続編である。

- ・「西念寺本類聚名義抄における増補と脱漏 —観智院本にないカタカナ注記について—(一)」  
〔鶴見大学仏教文化研究所紀要〕第11号 平成18年4月
- ・「西念寺本類聚名義抄における増補と脱漏 —観智院本にないカタカナ注記について—(二)」  
〔鶴見大学紀要〕第44号 第一部 国語・国文学編 平成19年3月
- ・「西念寺本類聚名義抄における増補と脱漏 —観智院本にないカタカナ注記について—(三)」  
〔鶴見大学仏教文化研究所紀要〕第12号 平成19年4月
- ・「西念寺本類聚名義抄における増補と脱漏 —観智院本にないカタカナ注記について—(四)」  
〔鶴見大学紀要〕第45号 第一部 国語・国文学編 平成20年3月

資料48

観智院本
①首 ②止 ③アコト
④アツシ ⑤タ、 ⑥オホカリ

鎮国守国 神社本	高山寺本	西念寺本	観智院本
			
上18ウ	41ウ	44オ	仏上77

63、「カク」(44オ)

- ・「西念寺本類聚名義抄における増補と脱漏」――観智院本にないカタカナ注記について――(五)
- ・「西念寺本類聚名義抄における増補と脱漏」――観智院本にないカタカナ注記について――(六)
- ・「鶴見大学仏教文化研究所紀要」第13号 平成20年4月
- ・「鶴見大学紀要」第46号 第一部 国語・国文学編 平成21年3月刊行予定

資料48については、注記数は少ないものの、説明の便宜上、次に示すように各写本における注記の配列順に①②……の番号を付し、それに基づいて、表48-aに観智院本の配列順にしたがって各写本の注記の対照表を作成した。

表48-aを見ると、西念寺本の標出漢字「亶亶」のカタカナ注記⑦「カク」が観智院本に見えないことがわかる。

しかし、そもそも西念寺本においては、この⑦「カク」のみならず、続く⑧「早父」の記述も意味不明である。これらに関しては、先の拙論において触れているので、結論のみ述べると、表48-aに見るよ

表48- a

西念寺本	高山寺本	鎮国守国神社本
① 谷 ② 正 ③ アコト ----- ④ アツシ ⑤ タ、 ⑦ カク ⑧ 早义	① 僧 ② 正 ③ アコト ④ アツシ ⑤ オ小カリ ⑥ タ、	① 谷 ② □ ③ アコト ④ □ ツシ ⑤ タ、 ⑥ オ小カリ
観智院本	西念寺本	高山寺本
① 首 ② 正 ③ アコト ④ アツシ ⑤ タ、 ⑥ オホカリ	① 谷 ② 正 ③ アコト ④ アツシ ⑤ タ、 ⑥ オ、カリ ⑦ カク ⑧ 早义	① 僧 ② 正 ③ アコト ④ アツシ ⑤ タ、 ⑥ オ小カリ
鎮国守国神社本		
① 谷 ② □ ③ アコト ④ □ ツシ ⑤ タ、 ⑥ オ小カリ		

うに、西念寺本の⑦「カク」と⑧「早义」に対応する記述は、高山寺本・鎮国守国神社本にも見えないので、一見すると、カタカナ注記⑦「カク」と漢字注記⑧「早义」の二つが、それぞれ西念寺本において増補されたかのように見えるけれども、⑦「カク」と⑧「早义」は、本来、『多早义』という一つの反切注記として増補されたものと推測される。

ゆえに、西念寺本の⑦「カク」は、カタカナ注記として増補されたものではなく、反切注記『多早义』が増補された際に、『多』として記されたものが、後の転写の際に字画の類似により、⑦「カク」と誤写されたものと考えられるので、本稿の考察の対象とするものではないと考える。

資料49

鎮国守国神社本	高山寺本	西念寺本 〈解釈A〉	観智院本	鎮国守国 神社本	高山寺本	西念寺本	観智院本
① ㄱ ② 禾 せ	① ㄱ ② 音せ	① 式制 <sup>ㄱ</sup> ③ 禾 ④ セヨ ② ㄱ、	① ㄱ	世 <sup>ㄱ</sup> 禾 <sup>ㄱ</sup> せ	世 <sup>ㄱ</sup> 音 <sup>ㄱ</sup> せ	世 <sup>ㄱ</sup> 式制 <sup>ㄱ</sup> 禾 <sup>ㄱ</sup> セヨ ㄱ、	世 <sup>ㄱ</sup> ㄱ
				上18ウ	43オ	44ウ	仏上78

64、「禾」／65、「セヨ」(44ウ)

資料49については、注記は少ないものの、説明の便宜上、次に示すように各写本における注記の配列順に①②……の番号を付し、それに基づいて、表49-aに観智院本の配列順にしたがって各写本の注記の対照表を作成した。

対照表の作成にあたり、その見かけ上の書写状況を優先して作表すると、西念寺本における、標出漢字「世」の注記の現況は、西念寺本〈解釈A〉のようになる。そして、各写本間の注記の対応関係については表49-aのようになり、西念寺本〈解釈A〉の③「禾」と④「セヨ」が観智院本に見えないということになる。<sup>87)</sup>

さて、草川昇氏は、この項目「世」に記された和訓「ヨ」について、表49-bのように挙例しておられる。<sup>88)</sup>

表49-bにおいては、西念寺本のカタカナ注記を「ㄱ」と記されているが、これは表49-aにおける西念寺本〈解釈A〉においては存在していない。しかしながら、草川氏は、西念寺本〈解釈A〉における②「ㄱ、」に関する項目を立てておられないことと、表49-bの西念寺本の挙例が「ヨ」ではなく、異体字の「ㄱ」であることからすると、草川氏が例示された西念寺本の「ㄱ」は、西念寺本〈解釈A〉の②「ㄱ、」の「、」を除いたもの

表49- a

① ヨ	観智院本
① 式制又 ② 与、 ③ 禾 ④ セヨ	西念寺本（解釈A）
① 与 ② 音せ	高山寺本
① 与 ② 禾せ	鎮国守国神社本

表49- b（草川昇『五本対照類聚名義抄和訓集成』（四）429頁より抜粋）							
和訓	漢字	観智院本	蓮成院本	高山寺本	西念寺本	図書寮本	備考
ヨ	世	ヨ	与	与	与		高本、西本 世

ではないかと推測される。

草川氏は、②「与、」の「、」の存在を認められなかったと思われるのであるが、それについては、ひとまず別問題とすると、資料49の西念寺本の見かけ上の記載状況にしたがった場合、西念寺本（解釈A）の②「与、」と観智院本の①「ヨ」、および高山寺本の①「与」、鎮国守国神社本（蓮成院本）の①「与」とが対応するという点において、本稿の表49- aにおける解釈と草川氏の表49- bにおける解釈は同様であることになる。

この場合の西念寺本の②「与、」は次のように理解することができる。

〈a〉西念寺本の②「与、」は、元来、「与」一字で『代』の意のカタカナ注記で、転写の過程で誤って「、」が下接したものである。

しかし、ここまでの、資料49の西念寺本の見かけ上の状況を優先した西念寺本〈解釈A〉は、やはり妥当でないようである。西念寺本〈解釈A〉の記述に対する解釈上の問題点は、③「禾」と④「セヨ」については、意味不明とせざるを得ない点にある。

因に草川氏も、西念寺本の『禾・セ・ヨ』の文字列における、和訓としての区切りの可能性としての『禾(ワ)』『禾(ワ)セ』『禾(ワ)セヨ』、『禾(ネ)』『禾(ネ)セ』『禾(ネ)セヨ』および『セ』『ヨ』『セヨ』のいずれに対しても項目立てして示されてはいない。

そこで、表49―aの高山寺本の②「音せ」と鎮国守国神社本の②「禾せ」に対しては、西念寺本〈解釈A〉の③「禾」と④「セヨ」の「セ」を合わせた『禾セ』が和音注記として対応するのではないかという考えが浮かんでくる。これにしたがって、資料49の見かけ上の様子を無視して、西念寺本の記述を注記の意味的視点より再検討した結果が、次の西念寺本〈解釈B〉である。

西念寺本〈解釈B〉の場合、③「禾セ」の二文字の間隔が不自然に空いていることが問題ではあるが、西念寺本の書写状況においては、注記の途中でそうした間隔が空いてしまうことは珍しいことではないので、それについては、特に問題としないこととすると、これに基づいた各写本の注記の対応関係は、表49―cのように改めることができる。

西念寺本〈解釈A〉の③「禾」と④「セヨ」の「セ」を結びつけたことにより、西念寺本〈解釈B〉においては、③

「禾セ」の他に、新たに④「ヨ」が誕生することになった。この西念寺本

〈解釈B〉の④「ヨ」を、観智院本の①「ヨ」、高山寺本・鎮国守国神社本の

①「ㄱ」に対応すると考えることで、西念寺本の②「ㄱ、」を、観智院本

の①「ヨ」、および高山寺本・鎮国守国神社本の①「ㄱ」に相当する注記

西念寺本 (解釈B)	
① 式制 <sup>ㄱ</sup> 又	② ㄱ、
③ 禾	セ
	④ ヨ

表 49-1c (西念寺本〈解釈B〉に基づく対照表)

観智院本	西念寺本〈解釈B〉	高山寺本	鎮国守国神社本
① ヨ	① 式制 <sup>ナ</sup> 又 ② ㄱ、 ③ 禾セ ④ ヨ	① ㄱ ② 音セ	① ㄱ ② 禾セ

として扱う必要がなくなり、西念寺本の第二注記を、「、」を下接した②「ㄱ、」のままの状態で認めることが可能となる。

この場合の西念寺本の②「ㄱ、」は次のように理解することができる。

〈b〉西念寺本の②「ㄱ、」は、『代々』の意のカタカナ注記で、転写の過程で増補されたものである。

資料49に見るように、西念寺本の②「ㄱ、」の「、」は、「ㄱ」の真下よりもやや左に寄った位置に記されているものの、やはり、確かに存在しており、②「ㄱ、」を『代々』と解することについては、標出漢字「世」の注記としては意義的に疑問を挟む余地がないことから、西念寺本〈解釈B〉において、②「ㄱ、」と④「ヨ」は注記の重複ということにはならず、注記のラインナップとして問題がない。

草川氏<sup>④</sup>におかれては、先に述べたように、西念寺本〈解釈B〉の④「ヨ」についても、いずれの項目にも例示が見えないので、『禾セヨ』で一つの和音注記の誤写などと考えられ、和訓の対象から外されたのかもしれない。

しかし、ここで気になるのは、異体字の問題と、高山寺本・鎮国守国神社本における語順の問題である。

まず、異体字の問題とは、右の〈b〉により、西念寺本②「ㄱ、」が増補されたことについて、増補される注記にカタカナの古体である異体字「ㄱ」を用いるであろうかという素朴な疑問である。因に、本稿における考察で、



カタカナの『ヨ』・『ㄱ』が係わるものは、次の6件である。

- 第7項「ヨル」(倣) ……観智院本の脱漏
- 第23項「ㄱシ」(暇) ……観智院本の脱漏
- 第26項「ㄱ」(憊) ……西念寺本の増補だが、「ㄱ」であること自体に疑問があった。
- 第27項「ヨ」(向後) ……条件付きながら、西念寺本の増補。
- 第65項「セヨ」(世) ……(本項目)
- 第75項「ヨメ」(嬬) ……西念寺本の増補。

勿論、西念寺本における増補の全てが、内題と共に並記されている「明和四」年に近い頃であるとは断定できないから、増補によっては、それ以前の可能性もあり、また、例えば江戸期における増補の際に、古体と言われる「ㄱ」を使用することは絶対にないとも言切れないから、あくまで素朴な疑問であるが、ともかく右の6件によれば、西念寺本の増補と考える第26項の「ㄱ」(憊)、第27項の「ヨ」(向後)、第75項「ヨメ」(嬬)の3件の内、古体の『ㄱ』が用いられたものは第26項の「ㄱ」(憊)のみで、しかも「ㄱ」字であること自体に疑問が在するものであった。とすれば、用例数が少ないながら、西念寺本における増補に際しては、カタカナの異体字『ㄱ』を用いることを積極的  
に認める状況にはないと言えないだろうか。

次に、語順の問題としては、表49-1-cの高山寺本・鎮国守国神社本において、西念寺本(解釈B)の語順にしたがうと、第一注記と第二注記の記載順序が逆になってしまうことである。これは、西念寺本(解釈B)において、第三注記

を和音注記③「禾セ」と解したにことよって、字訓注記の④「ヨ」が和音注記の次、全注記の末尾に位置することになってしまった所に問題がある。

つまり、西念寺本〈解釈B〉においては、新たな増補の際に、古体とされるカタカナ「ㄱ」を用いた②「ㄱ、」を増補することと、本来、その他の写本のように第一注記であったはずの④「ヨ」を和音注記③「禾セ」の後ろに移動するという、甚だ不自然な行為二つを行っているということになる。

そこで、それらの問題を解消する一案として、高山寺本と鎮国守国神社本の語順を優先し、それらに西念寺本〈解釈B〉の語順をそのまま対応させると、表49-dのように対照させることが考えられる。

表49-d

観智院本	西念寺本〈解釈B〉	高山寺本	鎮国守国神社本
①ヨ	①式制 <small>シキセイ</small> ②ㄱ、 ③禾セ ④ヨ	①ㄱ ②音セ	①ㄱ ②禾セ

表49-dの場合、カタカナ注記としては、西念寺本においては、新たに④「ヨ」が増補されたということになり、②「ㄱ、」との関係については、次の〈C〉が案出される。

〈c〉西念寺本の④「ヨ」は、本来、『ㄱ』であった第二注記に、誤って「、」が下接されて、『代々』の意の②「ㄱ、」となったため、標出漢字「世」の項目の和訓に『代』の意の注記がないことに気付いた人物が増補したもの。

西念寺本の②「ㄱ、」に対する意義的解釈については、先の〈a〉説が復活することにもなる。

〈c〉は、西念寺本の②「ㄣ、」は、本来『代』を意味する和訓「ㄣ」であつたが、『何らかのきつかけ』で、「、」を下接することとなり、『代々』を意味する②「ㄣ、」と扱われることとなった。しかし、そのために『代』を意味する和訓が失われることにもなつてしまった。そこで、西念寺本系統の写本においては、新たに④「ヨ」を注記の末尾に増補したと考えるものである。

西念寺本の④「ヨ」が後の増補であるならば、表49-dに示したように、観智院本①「ヨ」、および高山寺本・鎮国守国神社本の①「ㄣ」に対応する西念寺本の注記は②「ㄣ、」ということになる。西念寺本の②「ㄣ、」は元来『ㄣ』であつたものの変化形と言えるものであるから、本稿における増補・脱漏の問題とは無関係となり、④「ヨ」のみが西念寺本の増補ということになる。

また、西念寺本の③「禾セ」については、高山寺本・鎮国守国神社本に対応する注記が見えることから、観智院本の脱漏となる。

さて、先に述べた西念寺本の本来の注記であつた「ㄣ」が「、」を下接することになった《何らかのきつかけ》については、資料49に示した高山寺本の①「ㄣ」の上部に付されている「・（点）」が関係しているのではないかと思われる。この「・（点）」の記載については、表49-bに示したように、草川氏も認めておられるが、特にコメントされてはいない。高山寺本の複製本の様子<sup>(3)</sup>では朱点のようにも思われるが、記載されている場所が、声点の上声や去声に相当する位置とも思えず、まさに「ㄣ」字の真上に付されている<sup>(89)</sup>。

高山寺本の「・（点）」は誤記や汚損の類であるのかもしれないが、仮にこれが声点の写し間違いであつたとすれば、声点の位置の問題はともかく、その声点が西念寺本系統の写本にも伝承された可能性が考えられる。ところが、西念寺本系統の写本では、かつては存在していたと思われるの声点を全く転写しなかったり、転写しても墨書であつ

たり、位置も適当であつたりと、声点の意味を理解していたとは到底思われない姿勢が見られるので、現西念寺本に至る転写の、ある段階までは正確に付されていた声点を適当に転写した結果、現在の西念寺本の②「ㄣ、」のようになってしまったのではないかと考える。先に述べたように、「、」の位置が「ㄣ」字の真下になく、やや左に寄っているのも、「、」が当初から覺符として記されたのではなく、声点であったことの名残なのかもしれない。

しかし、この偶然作られた②「ㄣ、」は、「、」を覺符と解する可能性を生んでしまったことで、標出漢字「世」の注記としては矛盾しないものとなつてしまい、④「ヨ」を必要とする事態になつたのではないだろうか。

また、觀智院本における③「禾セ」の脱漏については、意識的な削除の可能性もある。觀智院本においては、標出漢字「世」の項目は、ここ以外にも僧下109（雜部）に存在し、それに対応する記述が鎮国守国神社本（下二77才）に見える。觀智院本（僧下109）には、「ㄣ勢 ヨ / ヨ、 ツク」とあり、資料49の觀智院本よりも、記述が多いのであるが、類音注記「ㄣ勢」は見えるものの、和音に関する注記が見えない。鎮国守国神社本においてもほぼ同様の記述であるが、鎮国守国神社本においては資料49に②「禾セ」が見えている。觀智院本においては、『セ』という和音を認めたくなかつたのではないかと考えることもできる。

表50- a

② ソムク	① ムカフ	観智院本
④ ソムク	③ ムカフ	② オモテ
	① 「ヒ」 「オ」	西念寺本

① 「ヒ」 「オ」	② オ
④ ソムク	③ ムカフ

① ムカフ	② ソムク
----------	----------

資料50

西念寺本	観智院本
面 「ヒ」 「オ」 モテ ムカフ ソムク	面 ムカフ ソムク
45 オ	仏上 79

66、「オモテ」(45オ)

資料50については、注記数は少ないものの、説明の便宜上、次に示すように各写本における注記の配列順に①②……の番号を付し、それに基づいて、表50-aに観智院本の配列順にしたがって各写本の注記の対照表を作成した。

表50-aを見ると、西念寺本の標出漢字「面」のカタカナ注記②「オモテ」が観智院本に見えないことがわかる。

資料50では、高山寺本・鎮国守国神社本に対応する項目自体が見えないので、判断が難しいところではあるが、西念寺本の②「オモテ」の問題については、先に、観智院本に見えない①「ヒ」<sup>90</sup>「オ」について考察した際に触れている。

ここでは、西念寺本の①「ヒ」<sup>90</sup>「オ」と②「オモテ」が連続して記されている点から、①「ヒ」<sup>90</sup>「オ」と②「オモテ」とが増補される際の底本では、③「ムカフ」④「ソムク」が一行になって標出漢字「面」の左下に記され、右下のスペースが空欄であった状態が想定され、その空欄に①「ヒ」<sup>90</sup>「オ」と②「オモテ」が増補されたのではないかと推測した。ここでも、それにしたがって、観智院本に見えない②「オモテ」は西念寺本の増補とすることとする。

## 資料52

鎮国守国 神社本	高山寺本	西念寺本	観智院本
即 スナハチ	即 スナハチ	即 上稜 <sup>シヨウ</sup> ツク ルナハチ	即 スナハチ
上 20 オ	44 オ	46 ウ	仏上 82

68、「ツク」(46ウ)

## 資料51

鎮国守国 神社本	高山寺本	西念寺本	観智院本
予 トフ ラフ	予 トフ ラフ	吊 <sup>91</sup> トフ ラフ	予 トフ ラフ
上 20 オ	44 オ	46 ウ	仏上 82

67、「トフ」(46ウ)

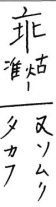
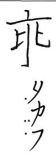
資料51の西念寺本の標出漢字「吊」のカタカナ注記「トフ」が観智院本に見えない。

これについては、先に、同じく観智院本に見えない「上釣」の考察の際に若干触れている。<sup>(91)</sup>これは高山寺本・鎮国守国神社本にも見えないので、西念寺本の増補と考えられる。

資料52の西念寺本の標出漢字「即」のカタカナ注記「ツク」が観智院本に見えない。

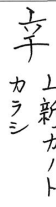
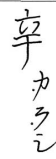
これについては、先に、同じく観智院本に見えない「上稜」の考察の際に若干触れている。<sup>(92)</sup>これは高山寺本・鎮国守国神社本にも見えないので、西念寺本の増補と考えられる。

資料54

西念寺本	観智院本
 46ウ	 仏上82

70、「ソムク」(46ウ)

資料53

西念寺本	観智院本
 46ウ	 仏上82

69、「カノト」(46ウ)

資料53の西念寺本の標出漢字「辛」のカタカナ注記「カノト」が観智院本に見えない。

これは高山寺本・鎮国守国神社本に項目自体が見えないので、判断が難しいところではあるが、これについては、先に、同じく観智院本に見えない「上新」の考察の際に若干触れている<sup>(98)</sup>。西念寺本において、「上新」と「カノト」「カラシ」の三つしかない注記の中の「上新」と「カノト」の二つを観智院本で脱漏したとは考えにくいので、「上新」と「カノト」は西念寺本の増補と考えられる。

資料54の西念寺本の標出漢字「朏」のカタカナ注記「ソムク」が観智院本に見えない。

これは高山寺本・鎮国守国神社本に項目自体が見えないので、判断が難しいところではあるが、これについては、先に、「上古」と「火准父」の考察の際に若干触れている<sup>(99)</sup>。西念寺本において、「古」と「火准父」、「ソムク」「タカフ」の四つしかない注記の中の「タカフ」以外の三つを観智院本で脱漏したとは考えにくいので、「ソムク」は西念寺本の増補と考えられる。

## 資料55

高山寺本	西念寺本	観智院本	鎮国守国 神社本	高山寺本	西念寺本	観智院本
①今 ⑦ホ□リ ⑧ホス ⑩ツクス ⑭サヲ ⑮小コ ⑯歟	①今 ②正 ③上乾 ④ヲカス ⑤モトム ⑥ユク ⑦ツクル ⑧歟 ⑨ヲ ⑩ハル歟 ⑪小トリ ⑫小爪 ⑬カハク ⑭ミル ⑮ツ子 ⑯アト ⑰ツクス ⑱オサ ⑲小コ	①今 ②正 ③上乾 ④ヲカス ⑤モトム ⑥ユク ⑦ツクレ ⑧歟 ⑨ヲハル ⑩歟 ⑪ホトリ ⑫ホス ⑬カハク ⑭ミル ⑮ツ子 ⑯アト ⑰ツク□ ⑱サヲ ⑲ホコ ⑳歟	テ 子 一 ハス カク ミル ツ子 アト ツクス サヲ 若 ソコハク	干 干 一 ハス カク ミル ツ子 アト ツクス サヲ 若 ソコハク	干 干 一 ハス カク ミル ツ子 アト ツクス サヲ 若 ソコハク	干 干 一 ハス カク ミル ツ子 アト ツクス サヲ 若 ソコハク
			上 20 オ	44 ウ	47 ウ	仏上 83

71、「ヲハル歟」(47ウ)

資料55の項目は注記数が多いので、次に示すように各写本における注記の配列順に①②……の番号を付し、それに基づいて、表55-aに観智院本の配列順にしたがって各写本の注記の対照表を作成した。



表55-a

鎮国守国神社本			
①今 ②正 ③上乾 ④ヲカス ⑤ユク ⑥モトム ⑦小トリ	⑧小ス ⑨カハク ⑩ミル ⑪ツ子 ⑫アト ⑬ツクス ⑭サヲ ⑮若― ⑯ソコハク	①今 ②正 ③上乾 ④ヲカス ⑤ユク ⑥モトム ⑦小トリ	⑧小ス ⑨カハク ⑩ミル ⑪ツ子 ⑫アト ⑬ツクス ⑭サヲ ⑮若― ⑯ソコハク
観智院本	西念寺本	高山寺本	鎮国守国神社本
①今 ②正 ③上乾 ④ヲカス ⑤モトム ⑥ユク ⑦ツクル ⑧― ⑨ヲハル ⑩― ⑪ホトリ ⑫ホス ⑬カハク ⑭ミル ⑮ツ子 ⑯アト ⑰ツク ⑱サヲ ⑲ホコ ⑳― ㉑	①今 ②正 ③上乾 ④ヲカス ⑤モトム ⑥ユク ⑦ツクル ⑧― ⑨ヲハル ⑩ヲハル ⑪小トリ ⑫小爪 ⑬カハク ⑭ミル ⑮ツ子 ⑯アト ⑰ツクス ⑱オサ ⑲小コ ⑳― ㉑	①今 ②正 ③音乾 ④ヲカス ⑤モトム ⑥ユク ⑦ホ□リ ⑧ホス ⑨カハク ⑩ミル ⑪ツネ ⑫アト ⑬ツクス ⑭サヲ ⑮小コ ⑯― ㉑	①今 ②正 ③上乾 ④ヲカス ⑤モトム ⑥ユク ⑦小トリ ⑧小ス ⑨カハク ⑩ミル ⑪ツ子 ⑫アト ⑬ツクス ⑭サヲ ⑮ソコハク ⑯若― ⑰

表55-aを見ると、西念寺本の標出漢字「干」のカタカナ注記⑩「ヲハル歟」が観智院本に見えないことがわかる。これは高山寺本・鎮国守国神社本にも見えないことから、一見すると、単純な西念寺本の増補であるかのように見えるが、簡単に結論を下すことはできない。

というのも、西念寺本には、⑩の他に⑨にも同じ「ヲハル歟」の注記が存在しているからである。

草川昇氏は、『ヲハル』の『干』項目の備考欄において、「西本重出」として、西念寺本に「ヲハル」の

注記が二つ存在することを認めておられる。<sup>(95)</sup>「西本重出」という記述にしたがえば、記載の順序からして、二つ目の方が重複しているということになる。とすれば、資料55の西念寺本の⑩「ヲハル歟」が重複しているということになるのかと言え、そう簡単には断定できない。

すなわち、ここで問題となるのは観智院本の⑩「一歟」という注記である。

表55-1b (表55-1aより抜粋)

観智院本		西念寺本		高山寺本		鎮国守国神社本	
⑦ツクル	⑧歟	⑦ツクル	⑧歟				
⑨ヲハル	⑩歟	⑨ヲハル歟	⑩ヲハル歟				
⑪ホコ	⑫歟	⑪小コ	⑫小コ	⑬小コ	⑭歟		

「ツクル」に関して『ツクル歟』の意となるし、②⑩「一歟」は、①⑨「ホコ」に関して『ホコ歟』の意となるものと思われ、⑩「一歟」は、⑨「ヲハル」に関して『ヲハル歟』という、それぞれ直前の注記に対する疑問の意を示しているものと考えられる。<sup>(96)</sup>

西念寺本においても、⑦「ツクル」に対して⑧「一歟」、⑨「小コ」に対して⑩「一歟」と観智院本と同様の対応を示しているが、観智院本の⑨「ヲハル」と⑩「一歟」の関係に対して、西念寺本の⑨と⑩の二つの「ヲハル歟」が対応するように見えているところに問題がある。

表55-1bに示したように、例えば

観智院本では、そもそも、標出漢字「干」の項目においては、「一歟」という記述が、⑩の他に⑧と②にも存在する。「一歟」の「一」の意味するところは、それぞれの前出の記述の省略の意と考えられるから、観智院本の⑧「一歟」は、⑦

右の問題は、西念寺本の⑨と⑩の範囲のみで考えれば、「ヲハル歟」の重複ということで話は終わってしまうが、西念寺本における「干」項目の注記⑦⑧や⑬⑭とのスタイルの統一性、および観智院本をも含めた場合のスタイルの統一性からすると問題は残されてしまう。つまり、西念寺本の⑨と⑩については、次のような〈a〉〈c〉の解釈が可能となってしまう。

〈a〉西念寺本の⑨「ヲハル歟」は、観智院本の⑨「ヲハル」に対応する『ヲハル』が西念寺本系統の転写時の底本に存在し、それに⑩「―歟」の「―」を脱漏した「歟」が下接して成立したもので、観智院本の⑨「ヲハル」と⑩「―歟」の二つの注記に対応すると考える。

〈b〉西念寺本の⑩「ヲハル歟」は、観智院本の⑩「―歟」に相当するもので、その省略記号「―」の『ヲハル』の意を文字化したものと考ええる。

〈a〉の場合、西念寺本の⑩「ヲハル歟」は、⑨「ヲハル歟」の重複と考えられる。

〈b〉の場合、西念寺本の⑨「ヲハル歟」は、観智院本の⑨「ヲハル」に相当する注記『ヲハル』が西念寺本の底本にあり、それに誤って『歟』字を付したことになる。しかし、注記の書写順からして、先に⑨「ヲハル歟」が成立した後に同じ記述の⑩「ヲハル歟」を記すことになり、不自然である。

右により、〈b〉の可能性は否定されるが、もう一つ可能性がある。例えば、書写時に、底本の、ある注記①「〇〇」に対して疑問を持った人物が、疑問であることを付記しようと試みた場合に、底本の注記①「〇〇」はそのまま

で、その周囲に「〇〇」が疑問であることを示す注記⑧「〇〇歟」を新たに付記する場合（CASE・1）と、その新たな疑問注記⑧を記す場合に「〇〇」を省略して、「―」と表記し、⑧「―歟」と記す場合（CASE・2）が考えられる。資料55の高山寺本・観智院本はCASE・2のスタイルを徹底しているが、CASE・1と2のいずれにしても⑧⑨二つの注記が存在することになる。西念寺本の⑨⑩は、CASE・1の⑧がない状況であるようにも見えるが、底本の注記に疑問を抱いた場合、その気持ちを書き表す方法には、他にもう一つ考えられる。

表55-1c

CASE・1	CASE・2	CASE・3
⑧「〇〇」 ⑨「〇〇歟」	⑧「―」 ⑨「―歟」	「〇〇歟」

について計り知ることは、⑧「〇〇歟」の見かけ上からは不可能であるから、ここでは不問とする。そもそも疑問に思っている⑧「〇〇」は、他の注記と同様の表記で記されているのではないものであるから、ともかくその他の注記と区別しようとする意図から、通常の表記としての⑧「〇〇」を積極的に消去することを試みた点で、CASE・1、2よりも疑問視する姿勢が強いようにも感じられる。

そして、このCASE・3が、ここでの西念寺本に生じたのであれば、次の〈c〉も考えられる。

〈c〉西念寺本の⑨「ヲハル歟」は、底本の『ヲハル』に強い疑問を抱いた人物が、『ヲハル』をその他の注記と区別する意を込めて、『ヲハル』に『歟』を下接したもの。

すなわち、底本の注記⑧「〇〇」に直接『歟』字のみを付すという場合（CASE・3）である。これは、底本の⑧「〇〇」を、心のうちで一度消去して、新たに⑧「〇〇歟」を記したとも考えられるが、心的状態

# 資料56

鎮国守国 神社本	高山寺本	西念寺本	観智院本
平 皮兵メシヒラフ又ニ便タシラフ ハカルヒトシウハル トナツアシケナリ 上 20 ウ	平 皮兵メシヒラフ又ニ便タシラフ ハカルヒトシウハル トナツアシケナリ 45 オ	平 皮兵メシヒラフ又ニ便タシラフ ハカルヒトシウハル トナツアシケナリ 47 ウ	平 皮兵メシヒラフ又ニ便タシラフ ハカルヒトシウハル トナツアシケナリ 仏上 83

72、「ヒヤウ」／73、「ヒヤヤウ」(47ウ)

「c」の場合、⑩「ヲハル歟」は、「a」の場合と同様に重複となる。  
 さて、「a」と「c」とを考えると、「a」の場合は、偶然、西念寺本に⑨「ヲハル歟」が誕生したのに対して、「c」の場合は、意識的に⑨「ヲハル歟」を作成したといえる。しかし、「c」の場合は、観智院本と西念寺本の系統の祖本となる写本を転写する、ある段階でそうした行為がなされたはずであるから、それから観智院本の状態が誕生するということは考えられないので、「c」も無理があるものと考ええる。  
 いずれにしても、西念寺本の⑩「ヲハル歟」は、新たに誕生した⑨「ヲハル歟」を目移りなどによって重複したものと考えることができる。  
 西念寺本の⑩「ヲハル歟」は、高山寺本・鎮国守国神社本にも見えないので、判断が難しいところではあるが、「a」が正しければ、西念寺本の⑨「ヲハル歟」は、観智院本の⑨「ヲハル」と⑩「一歟」に対応し、西念寺本の⑩「ヲハル歟」は、それを重複させた増補と考えられる。

資料56の項目は注記数が多いので、次に示すように各写本における注記の配列順に①②……の番号を付し、それに基づいて、表56-aに観智院本の配列順にしたがって各写本の注記の対照表を作成した。  
 表56-aを見ると、西念寺本の標出漢字「平」のカタカナ注記⑦「ヒヤウ」と⑧「ヒヤヤウ」が観智院本に見えないことがわかる。これは高山寺本・鎮国守国神社本

鎮国守国神社本	高山寺本	西念寺本	観智院本
①皮兵又 ②タヒラカ□ ③又 <sup>一</sup> 便 ④タクラフ ⑤ハカル ⑥ヒトシウ爪 ⑦不 <sup>一</sup> ⑧トナツアシケナリ ⑨トコトくシ	①皮□反 ②タヒ□カニ ③ハカル ④タクラフ ⑤ヒトシウス ⑥又音□	①皮兵又 <sup>一</sup> ②タヒフカニ ③タクラフ ④ハカル ⑤ヒトシウ爪 ⑥又 <sup>一</sup> ⑧ <sup>一</sup> 便 ⑦ヒヤウ ⑧ヒヤウ	①皮兵又 ②タヒラカニ ③タクラフ ④ハカル ⑤ヒトシウス ⑥又 <sup>一</sup> 便

『ウ』を書き記そうとして、⑧「ヒヤヤウ」と誤ったということになる。しかし、これは不自然な感がある。⑦「ヒヤウ」を記した後で再び同じ注記を記す必要がないからである。⑦「ヒヤウ」が項目の最後であることからして、目移りなどによる同じ記述の重複というののも考えにくいように思われる。

むしろ、先に⑧「ヒヤヤウ」と書き損じたために、⑦「ヒヤウ」と書き直したとする方が自然と考える。仮に、

にも見えないので、西念寺本の増補と考えられる。

ところで、草川昇氏<sup>(9)</sup>は、⑦「ヒヤウ」と⑧「ヒヤヤウ」のいずれも用例として採用していないから、両者ともに和訓と解釈されなかったものと思われる。

しかし、和訓でないということは、それらを標出漢字「平」の字音注記と考えられたということになりそうだが、その場合、⑧「ヒヤヤウ」は意味不明である。⑧「ヒヤヤウ」は、⑦「ヒヤウ」の「ヤ」が誤って重複したものと解釈するのが通常の判断のように思われるが、そうすると、一般的な解釈としては、⑦「ヒヤウ」を記した後で、もう一度「ヒヤ

表56- a

観智院本	西念寺本	高山寺本	鎮国守国神社本
①皮兵叉 ②タヒラカニ ③タクラフ ④ハカル ⑤ヒトシウス ⑥又「便」	①皮兵叉 <sup>△</sup> ②タヒフカニ ③タクラフ ④ハカル ⑤ヒトシウ爪 ⑥又「便」 ⑦ヒヤウ ⑧ヒヤヤウ	①皮□反 ②タヒ□カニ ③タクラフ ④ハカル ⑤ヒトシウス ⑥又音□	①皮兵叉 ②タヒラカ□ ③タクラフ ④ハカル ⑤ヒトシウ爪 ⑥又「便」 ③又「便」
			⑦不— ⑧トナツアシケナリ ⑨トコトくシ

『ヒヤウ』を配することは、自然な発想である。しかし、「エ便」の左隣に増補を試みた際には、⑧「ヒヤヤウ」と誤ってしまい、やむなく「エ便」の下に改めて⑦「ヒヤウ」と記すことになったのではないかと考えられる。

現存本以前の増補の場合には、様々な場合があり得そうだが、それらの場合には、⑧「ヒヤヤウ」の意味内容に対して疑問を持たなかったということになる。

『ヒヤウ』の増補を意図したのが、現存の西念寺本の転写時であった場合は、資料56に示したように、⑥「又「便」」の「エ便」から⑦「ヒヤウ」⑧「ヒヤヤウ」は、「平」の項目の途中で改行された後の記述であるから、⑥「又「便」」を記した後に『ヒヤウ』を増補しようとする際には、次項目との間隔の節約のために、「エ便」の左隣に

## 資料57

高山寺本	西念寺本	観智院本	鎮国守国 神社本	高山寺本	西念寺本	観智院本
① 除力反 ② ナヲシ ③ アタヒ ④ タ、 ⑤ トノ井 ⑥ タ、チニ ⑦ アタル ⑧ ミル ⑨ タ、シ ⑩ タ、ニ ⑪ 又音地キ	① 除力又 ② ナヲシ ③ アクヒ ④ 爪クム ⑤ ト ノ井 ⑥ タ、 ⑦ タ、チニ ⑧ アタル ⑨ シル ⑩ タ、シ ⑪ タ、ニ ⑫ 禾地キ	① 除力又 ② ナヲシ ③ アタヒ ④ スクム ⑤ トノ井 ⑥ タ、 ⑦ タ、チニ ⑧ アタル ⑨ ミル ⑩ タ、シ ⑪ 禾地キ	直 除カメナヲエ アタヒスクムトノ井 タ、 タ、チニ アタル ミル タ、シ 禾地キ アタル タ、シ タ、ニ 禾地キ	直 除カメナヲエ アタヒスクムトノ井 タ、 タ、チニ アタル ミル タ、シ 禾地キ アタル タ、シ タ、ニ 禾地キ	直 除カメナヲエ アタヒスクムトノ井 タ、 タ、チニ アタル ミル タ、シ 禾地キ アタル タ、シ タ、ニ 禾地キ	直 除カメナヲエ アタヒスクムトノ井 タ、 タ、チニ アタル ミル タ、シ 禾地キ アタル タ、シ タ、ニ 禾地キ
			上 20 ウ	45 オ	48 オ	仏上 84

74、「タ、ニ」(48オ)

資料57の項目は注記数が多いので、次に示すように各写本における注記の配列順に①②……の番号を付し、それに基づいて、表57-aに観智院本の配列順にしたがつて各写本の注記の対照表を作成した。

表57-aを見ると、西念寺本の標

出漢字「直」のカタカナ注記①

「タ、ニ」が観智院本に見えないことがわかる。これは高山寺本・鎮国守国神社本には対応する注記が見えるので、観智院本の脱漏と考えられる。

西念寺本の①「タ、ニ」の問題を除くと、観智院本と西念寺本の注記の配列は



鎮国守国神社本					
⑦ アタル	④ アタヒ	① 除力又	② ナヲシ	③ タ、	
⑧ ヲ、シ	⑤ タ、チニ	⑥ ミル			
⑨ タ、ニ					
⑩ 禾地、					

表57- a





観智院本					
⑪ 禾地キ	⑩ タ、シ	⑨ ミル	⑧ アタル	⑦ タ、チニ	⑥ タ、
⑫ 禾地キ	⑪ タ、ニ	⑩ タ、シ	⑨ シル	⑧ アタル	⑦ タ、チニ
⑪ 又音地キ	⑩ タ、ニ	⑨ タ、シ	⑧ ミル	⑦ アタル	⑥ タ、チニ
⑩ 禾地、	⑨ タ、ニ	⑧ ヲ、シ	⑦ アタル	⑥ タ、	⑤ トノ井
					④ 爪クム
					③ アタヒ
					② ナヲシ
					① 除力又

可能性や、⑥「タ、」との語形的、意義的類似による積極的削除の可能性も考えられる。脱漏の理由については今後の課題としたい。

全く同じであるから、観智院本の底本に西念寺本の⑪「タ、ニ」に対応する注記があったとすれば、それはやはり、⑩「タ、シ」の次に記されていた可能性が高い。とすれば、⑩「タ、シ」の直後の『タ、ニ』は、⑩「タ、シ」と表記が類似していることで、見落とされた可能性が考えられる。




しかしながら、⑦「タ、チニ」との表記上の類似から、見間違による積極的削除の

## 資料59

鎮国守国 神社本	高山寺本	西念寺本	観智院本
 アナツル 上25ウ	 俗俚字 51ウ	 谷俚字 54ウ	 女科反 仏中7

## 76、「アナツル」(54ウ)

## 資料58

鎮国守国 神社本	高山寺本	西念寺本	観智院本
 ヤモメ 上25オ	 音霜 51オ	 ヤモメ 54オ	 ヤモメ 仏中6

## 75、「ヨメ」(54オ)

資料58の西念寺本の標出漢字「嬢」のカタカナ注記「ヨメ」が観智院本に見えない。これは高山寺本・鎮国守国神社本にも見えないので、西念寺本の増補と考えられる。

各写本に共通する注記「ヤモメ」の意からすれば、西念寺本の「ヨメ」は、意義的には重なっているが、「ヨメ」は「ヤモメ」の上位語と考えられるから、改めて「ヨメ」を増補することは、「嬢」の説明を詳しくするためというよりも、和訓の用例を加えたということに留まるかもしれない。ただ、各写本の「嬢」項目の前辺りの「娣」「姒」の項目にも「ヨ(与)メ」の注記が見えるので、西念寺本の「嬢」項目における「ヨメ」の増補は、それらに影響されたのかもしれない。

資料59の項目は、説明の便宜上、次に示すように各写本における注記の配列順に①②……の番号を付し、それに基づいて、表59-1aに観智院本の配列順にしたがって各写本の注記の対照表を作成した。

表59-1aを見ると、西念寺本の標出漢字「婢」のカタカナ注記②「アナツル」が観智院本に見えないことがわかる。これは高山寺本には見えないが、鎮国守国神社本には見えるので、判断が困難なところであるが、鎮国守国神社本に見えることを優先して、観智院本の脱漏と考えたい。

ツル」のような順番であつて欲しいところである。

表59- a

②女耕字	①首倅字	観智院本	鎮国守国神社本 ①谷倅字 ②女耕反 ③アナツル	高山寺本 ①俗倅字 ②女耕反	西念寺本 ①谷倅字 ②アナ ツル ③女 耕反	観智院本 ①首倅字 ②女耕反
③女耕反	①谷倅字 ②アナツル	西念寺本				
②女耕反	①俗倅字	高山寺本	鎮国守国神社本 ①谷倅字 ③アナツル ②女耕反			

転写の段階としては、高山寺本の  
のように漢字注記のみであった段  
階から、西念寺本や鎮国守国神社  
本のようにカタカナ注記「アナツ  
ル」が増補された段階があったも  
の、観智院本では増補された  
「アナツル」を脱漏したものと推測  
される。

さて、西念寺本の②「アナツル」が、高山寺本のような段階から増補されたものであるとすると、西念寺本の①「谷俤字」②「アナツル」③「女耕反」という配列順は不審であり、鎮国守国神社本の①「谷俤字」②「女耕反」③「アナ

〔アナツル〕増補前の写本

写本 〈X〉
① 谷俾字 ② 女耕反

〔写本 〈X〉〕に「アナツル」が増補された写本

写本 〈Y〉
① 谷俾字 ② 女耕反 ③ アナツル

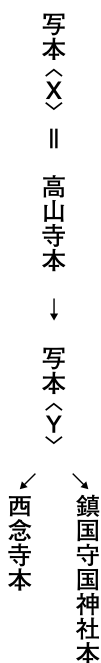
この西念寺本の語順の問題を解決するためには、次に示した、架空の写本〈X〉と〈Y〉を想定する必要がある。以下の説明においては、西念寺本の文字表記を採用するが、便宜的なものである。

写本〈X〉は、「アナツル」が増補される以前から記されていた注記①「谷俾字」と②「女耕反」が、標出漢字「婢」の下に横並びに配列されていた写本と仮定する。この写本〈X〉に「アナツル」の増補がなされる際に、①「谷俐字」の下に増補して成立したのが、写本〈Y〉と考える。

この写本〈Y〉の注記の状況を横並びに①②③の順に見て、「谷俐字」「女耕反」「アナツル」の順に理解し、転写しているのが、現存の鎮国守国神社本であり、鎮国守国神社本では、それを資料59のように三行書きにした。

これに対して、西念寺本の場合は、写本〈Y〉の注記の状況を縦並びに①③②の順に見て、「谷俐字」「アナツル」「女耕反」の順に理解して転写したために、現在の語順となったと考えられる。

写本〈X〉の注記記載状況は高山寺本と同一であるから、



という展開がなされたと考えることもできる。

資料60

観智院本	鎮国守国 神社本	高山寺本	西念寺本	観智院本
①丁故反 ②子タム ③ソ子ム ④アラソフ ⑤ウハナリ ⑥オ子タミ ⑦ウラヤム ⑧上蟲	姤 丁故反 アラソフ モノネタミ ウラヤム ネタミ ソ子ム ウハナリ ネタミ オ子タミ ウラヤム 上 26 オ	姤 丁故反 アラソフ モノネタミ ウラヤム ネタミ ソ子ム ウハナリ ネタミ オ子タミ ウラヤム 52 オ	姤 上故反 アラソフ ネタミ ソ子ム ウハナリ ネタミ オ子タミ ウラヤム 55 オウ	姤 丁故反 アラソフ モノネタミ ウラヤム ネタミ ソ子ム ウハナリ ネタミ オ子タミ ウラヤム 仏中 8

77、「ネタミ」(55オ・ウ)

また、一方、「アナツル」が見えない観智院本の状況も写本〈X〉と同様であるように見えるが、こちらは観智院本と西念寺本が近いとされる点から、やはり、写本〈Y〉を経て「アナツル」を脱漏していると考えたい。しかし、この「アナツル」という注記自体は、標出漢字「婢」の意義からすると、やや拡大解釈している感があるので、観智院本の書写者は、その点を問題として、敢えて「アナツル」を削除したのかもしれない。

資料60の項目は注記数が多いので、次に示すように各写本における注記の配列順に①②……の番号を付し、それに基づいて、表60―aに観智院本の配列順にしたがって各写本の注記の対照表を作成した。

表60―aを見ると、西念寺本の標出漢字「姤」のカタカナ注記⑥「ネタミ」が観智院本に見えないことがわかる。これは高山寺本・鎮国守国神社本には対応する注記が見えるので、観智院本の脱漏と考えられる。

ところで、資料60の観智院本の⑥「オ子タミ」の記載状況を見ると、「オ」と

表60- a

[illegible]

「子タミ」の間には不自然な間隔が  
存することに気付く。ここから、観  
智院本の書写者においては、⑥「子  
子タミ」で一つの注記と考えていな  
かったのではないかという疑いが生  
ずる。

そこで、表60-1aにしたがって、その他の写本の様子を見ると、観智院本の⑥「オ子タミ」に対応する注記は、西念寺本・鎮国守国神社本で「牛子タミ」、高山寺本で「モノネタミ」とあることから、観智院本の⑥「オ子タミ」の「オ」は『モノ』の意の『牛』を誤写したものと推定される。そして、現存の観智院本において、「オ」と「子タミ」の間に間隔を設けているということは、底本、もしくはそれ以前の写本において、

既に「オ子タミ」と誤記されており、以後の書写者が「オ子タミ」の語義を理解できないために、「オ」と「子タミ」の間に間隔を取って、「オ」は理解不能のまま、「子タミ」のみで注記として理解していたのではないかと思われる。「子タミ」の方は、②「子タム」の例もあり、標出漢字「妬」の注記としては、理解しやすかったものと思われる。

そうした状況が存在したとなると、仮に現存の観智院本に至る以前の写本の段階において、西念寺本の⑥「ネタミ」に相当する注記が、西念寺本の語順および表記と同様に記されていた場合、観智院本では「オ」「子タミ」の直前に、もう一つ「ネタミ」の注記が記されていた段階が存在したことになるから、注記の重複を嫌って、敢えて一方を削除したのかもしれない。しかし、その場合には、注記配列としては二つ目（後者）となる⑥「オ子タミ」の「子タミ」の方を削除しそうなものではあるが、⑥「オ子タミ」の「子」字を『ネタミ』の『ネ』字よりも好んだのかもしれない（重複削除説）。

もう一つ考えられるのは、西念寺本の⑥「ネタミ」に相当する注記、例えば『ネタミ』が、やはり現存の観智院本以前の写本に存在したと仮定し、その『ネタミ』については、観智院本の②「子タム」の「ム」の右に『ミ』を記すことで、『子タム』と注記をまとめてしまったために、『ネタミ』注記自体は消えてしまったというものである。しかし、この場合、観智院本の②「子タム」の「ム」の右に『ミ』が記されていないことはならない。実際に観智院本の②「子タム」の「ム」の右に『ミ』は記されていないが、これは転写の過程で『ミ』字を書き漏らしたためであると考える（合一後脱漏説）。

重複削除説と合一後脱漏説のいずれも推測を重ねているが、現存の観智院本の⑥「オ子タミ」の「オ」が「牛」の誤写であることと、「オ」と「子タミ」の間に不自然な間隔が存在することからすれば、重複削除説の方が根拠となるものが存することにより、こちらを支持したい。一つ目（前者）を削除した点については、今後の課題とする。

## 三

以上、西念寺本に見えて観智院本に見えないカタカナ注記、七十七例についての考察を試みた。その結果、全ての例が西念寺本における純粋な増補と言えるわけではなく、西念寺本に見えて観智院本に見えない理由については、様々なものがあることが知られた。それらを分類すると次のようになる。<sup>97)</sup>

## 西念寺本の増補（37例）

## 〈和音等〉

13 「禾シ」、37 「ツ井ンテン」、56 「禾タリ\*」、72 「ヒヤウ」、73 「ヒヤヤウ\*」

## 〈和訓〉

1 「ヲチ、ゝ」、6 「アク」、19 「タア（テ）ワル」、20 「小カ」、27 「ヨ\*」、29 「爪ム」、  
32 「サイナクル\*」、38 「タゝサカ」、42 「ユク」、43 「サル」、44 「ハルカナリ」、  
45 「ト小シ」、46 「コユ」、52 「テカシ\*」、60 「ヲサ、ゝシ」、65 「セヨ\*」、66 「オモテ」、  
67 「トフ」、68 「ツク」、69 「カノト」、70 「ソムク」、75 「ヨメ」

## 〈和音か和訓か不明〉

22 「禾サ」

## 〈疑問注記〉

2 「ホカ」、25 「シル敷\*」、39 「ナカ」

## 〈衍字〉

40 「ト」

## 〈意味不明のもの〉

15 「タス」、16 「ナイ」、26 「与」、36 「トトフ」、41 「スミ」



西念寺本の重複（5例）

31 「シネサ\*」、48 「ヲサム」、51 「ワタル」、59 「ナツリ\*」、71 「ヲハル歟」

観智院本の脱漏（25例）

3 「イツクンソ」、4 「イツクニソ」、5 「アフ」、7 「ヨル」、12 「ナル」、17 「トシ」、  
21 「カシ\*」、23 「ウシ」、24 「ノトル」、28 「クトシ\*」、30 「ユク」、33 「タノシ」、  
34 「ユク」、49 「タフ」、55 「タケ、ツワオ\*」、57 「爪\*」、58 「ウコク」、  
62 「オホイナリ\*」、64 「禾\*」、74 「タ、ニ」

〈重複を嫌った削除〉  
77 「ネタミ」

〈その他の削除〉  
9 「ギレカヒ\*」、14 「ソネニ」、47 「カクヒ」、76 「アナツル」

その他（10例）

〈反切注記の振仮名〉  
50 「ク禾」

〈反切注記の誤写〉  
63 「カク\*」

〈増補でも脱漏でもないもの〉  
8 「オシ」、10 「フシテ\*」、18 「エ」、35 「ノフ」、53 「禾喜也\*」、54 「ナカレ\*」、

61 「ナク\*」

〈判断不能〉  
11 「タ、スナフ」

「西念寺本の増補」と考えられるものについては三十七例が確認された<sup>(98)</sup>。その内〈疑問注記〉2「ホカ」、24「シル歟\*」、39「ナカ」の三例と、〈衍字〉40「ト」の一例を除くと三十三例となるが、この三十三例が、標出漢字に対する注記の充実を意図した純粋な増補であったということが考えられる。しかし、その三十三例には、〈意味不明のもの〉15「タス」、16「ナイ」、26「エ」、36「トトフ」、41「スミ」の五例が含まれており、この五例の扱いについては、慎重でなくてはならないが、意味不明となった原因が、西念寺本系統の転写時の誤写等であったとすれば、結果的に増補した価値は失われてしまったものの、増補という行為自体は評価されてよいと思われる。

「観智院本の脱漏」と考えられるものには、不注意が原因ではなく、敢えて削除したのではないかと推測されるものが五例見られた<sup>(99)</sup>。しかし、例えば、21「カシ\*」、28「クトシ\*」、55「タケ、ツワオ\*」など、西念寺本で誤写と考えられたものが、観智院本の底本においても同様に誤って記されていたならば、意味不明による注記として削除されたと考えてもよいかもしれないが、この点については、今後の課題とする。

「その他」の〈判断不能〉とした11「タ、スナフ」は、高山寺本・鎮国守国神社本との対照ができないことにより、判断を保留せざるを得なくなった例である。考察の結果、判断不能となったのは、この一例のみであるので、本稿の調査結果を大きく左右するものではないが、西念寺本の増補でも、観智院本の脱漏でもある可能性を有するものである。また、本稿での考察により、副次的に得られた情報としては、次の三件があった。

- ・西念寺本が改編本類聚名義抄の原初形態を伝えていると思われる例……………1「ヲチ、ゝ」、10「フシテ\*」
- ・観智院本と西念寺本が近いことを示す例……………11「タ、スナフ」
- ・鎮国守国神社本と西念寺本が近いことを示す例……………53「禾喜也\*」

本稿においては、観智院本と西念寺本の対照を行い、「観智院本に見えないカタカナ注記」について、当初、七十七例を確認していたが、右にまとめた結果によると、西念寺本の純粹な増補としては三十三例ということになる。やはり、考察前に「観智院本にないカタカナ注記」と思われた七十七例を、そのまま西念寺本の増補と判断することは危険であることを確認した。

また、一方、観智院本の脱漏の中、削除の可能性がある五例については、観智院本系統の転写時において、改訂作業が存在した可能性を示唆するものと考えられる。この点についても今後の課題とする。

## 注 記

- (85) (9) の草川氏も「カク」の項目に、この西念寺本の用例を配しておられるが、とくに言及されていない。
- (86) (2) の e 3 の第 43 項 (資料 35) 参照。
- (87) ①「式制<sup>セイ</sup>文」については、(2) の e 3 の第 48 項 (資料 38) で触れている。
- (88) 表 49-1b においては、各用例の所在については省略したが、声点等は転記した。また、備考欄に「高本、西本、世」とあるが、(3) の複製本からは高山寺本の標出漢字については、資料 49 に示したように「世」とあるように見える。
- (89) 望月郁子『類聚名義抄四種声点付和訓集成』(笠間索引叢刊 44 昭和 49 年 3 月) は、この高山寺本の用例を掲出しており、「ㇿ」字の真上の「・」を声点と認めておられるが声調については不明。(3) の複製本を見ると、この裏頁の該当箇所(「面子」項目)周辺には記述がないことから、裏頁の記述による墨の滲みなどというものでもないようである。
- (90) (2) の e 3 の第 52 項 (資料 42) 参照。
- (91) (2) の e 3 の第 53 項 (資料 43) 参照。
- (92) (2) の e 3 の第 54 項 (資料 44) 参照。
- (93) (2) の e 3 の第 55 項 (資料 45) 参照。
- (94) (2) の e 3 の第 56・57 項 (資料 46) 参照。

(95) (9) の草川氏の「ヲハル」項目の西念寺本の挙例において、「ヲハル歟」ではなく「ヲハル」とされていることについては、観智院本の⑨「ヲハル」と⑩「一歟」に対応させて、西念寺本の⑨⑩の場合も、「ヲハル」と「歟」を別々に考えておられるのかもしれない。

(96) 標出漢字「干」を「ツクル(レ)」と読む例には、大東記念文庫蔵十卷本「伊呂波字類抄」(巻四・622頁)に、「造ツクル(中略)干干已上同 / 見長賊」がある。また、「ホコ」と読む例については、元和古活字那波道圓本「和名類聚抄」(巻十三・十五才)に「楊雄方言云載へ九劇反和ノ名保古 或謂之干或謂之戈古禾反」、また、前田本「色葉字類抄」(上44ウ3)に「戟ヲヨコ干同」とある。しかし、大東記念文庫蔵十卷本「伊呂波字類抄」には「荷ヲヨコ(中略)戟ル劇反ノ和名保古(中略)干ヲ」(巻二・311頁)の例がある一方、「楯楯ヲテノ楯イ(中略)干干已上同ノ古塞也」(巻四・407頁)として、「ヲテ」の例もある。

元和古活字那波道圓本「和名類聚抄」は、京都大学文学部国語学国文学研究室編「諸本集成和名類聚抄」(本文篇)増訂版(臨川書店 昭和43年7月)、前田本「色葉字類抄」は、『尊経閣蔵三卷本色葉字類抄』(勉誠社 昭和59年5月)、大東記念文庫蔵十卷本「伊呂波字類抄」は、『十卷本伊呂波字類抄』(雄松堂出版 昭和62年5月)によった。

(97) 以下の「まとめ一覧」においては、本稿における当初の項目立て、すなわち、考察以前に「観智院本にないカタカナ注記」と思われたものを掲げている。しかし、考察の結果、例えば「西念寺本の増補」に分類される65「セヨ」は、「ヨ」のみ増補であるという結論であったように、項目として示されたものとは異なる記述が、増補や脱漏の問題となるケースもあったので、誤写等も含めて、当初の項目立てに異同があるものについては「\*」を付したので、適宜、先の具体的な考察を参照して頂きたい。

(98) 72「ヒヤウ」と73「ヒヤヤウ\*」の関係については、どちらかが「西念寺本の重複」と分類されるという考え方もあるが、ここでは一方を増補した後にさらにもう一方を増補したものととした。

(99) その他の削除に14「ソネニ」と76「アナツル」を含めたのは、あくまで可能性の範囲であり、積極的な根拠はないが、注意を喚起する意のみである。

〔付記〕 本稿は、第77回訓点語学会研究発表会(平成9年10月17日 於 山形大学)において、「西念寺本類聚名義抄における増補と脱漏について」と題して口頭発表したものをもとに加筆訂正したものである。